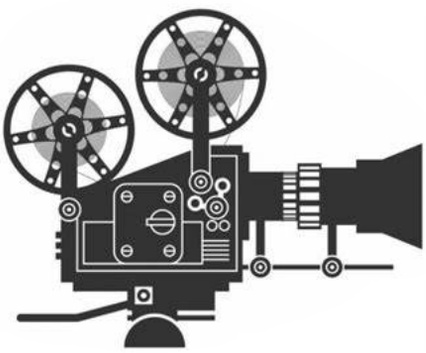


いにしえの映画つれづれ⑨
「代役列伝（1）」

千葉 豹一郎

あけましておめでとうございます。

本年もご愛読のほどよろしくお願い申し上げます。

年頭はちょっと趣向を変えて、配役変更にまつわるもろもろを3回に分けてお届けします。

さて、どんな役を演じ、どのような作品に出演するかは俳優にとっては生命線ともいえる。キャリアやギャラにも直結し、ひいては映画史を塗り替えることさえもある。

２本立て続けに失敗すれば、キャリアも失いかねないハリウッドではなおさらだ。

話題作ともなれば役の取り合いは熾烈をきわめ、枕営業（最近も騒ぎになりましたネ）も珍しくなかったといわれる。

しかし、自らの望む役を得られることは少なく、キャストインしても差し替えられることも珍しくない。

反対にやむを得ず引き受けた代役で、将来の開けた俳優も多い。

思わぬ幸運をつかんだ人もいれば、不運に泣いた人もいて悲喜こもごもだ。

誰もが知っているような過去の名作、話題作のいくつかも当初に予定されていたキャストではなかった！例えば、「カサブランカ」(42)がハンフリー・ボガートとイングリッド・バーグマンではなかったなら。

「シェーン」(53)がアラン・ラッドではなかったなら。

「サウンド・オブ・ミュージック」(65)がジュリー・アンドリュースではなかったなら。

もし、他の俳優が演じていたらさらに名声を高めていたのか、あるいはその逆か？こんな想像をめぐらせてみるのも面白い。

配役変更の理由は、まず辞退や拒否等の本人の意向、契約やギャラの問題、会社側の都合、出演者を含めた関係者のゴリ押し、撮影中のトラブルによる降板、病気やケガ、あるいは死亡等に分けられる。

割と知られているところでは、「ダーティハリー」(71) が挙げられる。

当初はフランク・シナトラが予定され、ポスターも現存している。

ハリー・キャラハンがシナトラやジョン・ウェインだったら…

「刑事」(68)のシナトラ。手前は元妻役のリー・レミック

シナトラは「ダイ・ハード」(88)と同じ原作者ロデリック・ソープの「刑事」(68)を好演していたので、目の付けどころは悪くなかった。

しかし、手のケガで出演不能となり、前回の「グリーンベレー」(68)でもちょっと触れたように、次に持ち込まれたジョン・ウェインが蹴ってクリント・イーストウッドに回った。

大スターともなれば、人一倍どころか人の何倍もプライドが高く、他の俳優が蹴った役を引き受けることはまずない。

ウェインも最初に持ち込まれなかったのが面白くなかったのだろう。

ウェインはともかく、小柄なシナトラが大型拳銃のS &W44 マグナムをぶっ放して大暴れする姿は想像できず、一回り以上若い長身のイーストウッドに合わせて設定等をかなり変更したのは想像に難くない。

結果、イーストウッドの代表作となって刑事物の流れも変え、パート5 まで制作されるヒット作となった。

シルベスター・スタローンの代表作「ランボー」(82)の元上官トラウトマン大佐も最初はカーク・ダグラスでクランクインした。

ところが、途中で制作陣と衝突して降板し、リチャード・クレンナに変更された。

専属制が一般的だったかつては、どこかに所属せずに映画に出演することはほぼ不可能だった。

専属制は収入が安定する反面、自分の望む映画になかなか出演できないジレンマがあり俳優にとっては痛しかゆしだ。

日本でも以前は各社相互の引き抜きを防止するための五社協定があり、会社の意向に従わなかった等の理由で何人もの映画スターが事実上映画界を追放されている。

映画会社が絶大な権限を有し、会社側の意向で一方的にキャストが決められそれに従うしかなかった。

古くは1930 年代にワーナー・ブラザースお得意のギャング映画で一世を風靡したジェームス・キャグニー。

「民衆の敵」(31)の撮影が始まって三日目、監督のウィリアム・ウェルマンがどうも違うぞということで、主役のエディ・ウッズと親友役のキャグニーとを逆にした。

当時でも同じ映画でのキャストの差し替えは珍しかったが、さすがに名称ウェルマンの眼は確かだった。

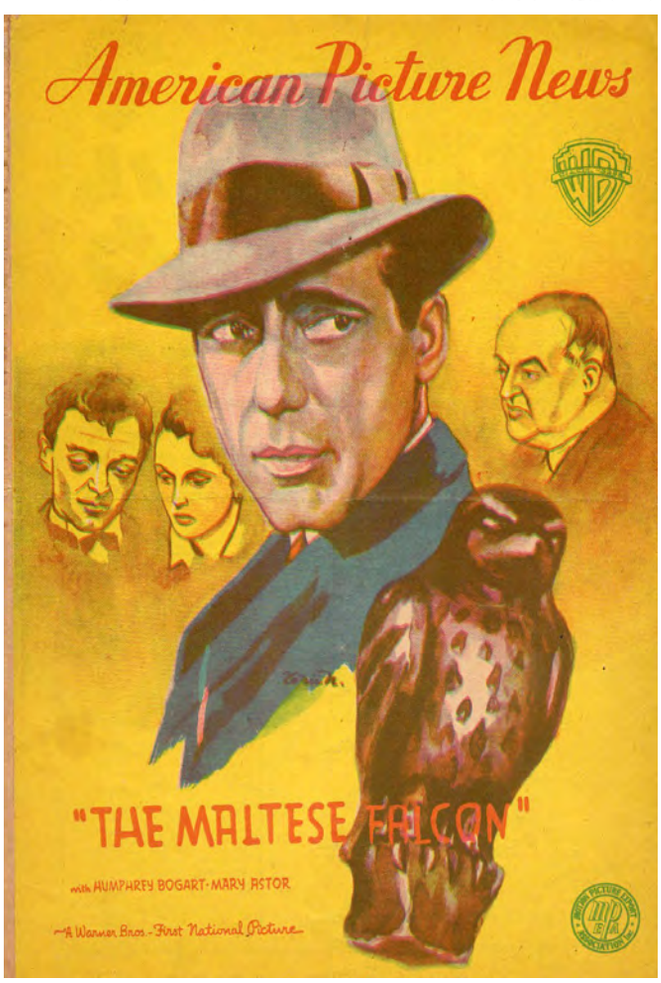
キャグニーはその役を生き生きと演じて、たちまちワーナーのトップスターに躍り出た。

気の毒だったのはウッズで、その後パッとせず古巣の舞台に戻ったもののやがて俳優から身を引いて裏方に転じた。

当時のワーナーにはキャグニーをはじめ、エドワード・G・ロビンソン、大物ギャングとの親しい付き合いで知られたジョージ・ラフトらがひしめき、助演級だったハンフリー・ボガートなぞキャグニーやロビンソンに何度撃ち殺されたかしれない。

ボガートが主演級のスターとなったのは「ハイ・シェラ」(40)や「マルタの鷹」(41)あたりからだ。

「マルタの鷹」は当初ジョージ・ラフトが



ボギーことハンフリー・ボガートの出世作となった「マルタの鷹」(41)

「風と共に去りぬ」(39)のゲーブルとヴィヴィアン・リー

予定されていた。

ところが、「マルタの鷹」は過去に2度の映画化が不成功に終わっていて、ラフトはリメイク作品には出演しないという契約条項があることや、それまでは脚本家として活躍していたジョン・ヒューストンの初監督作となるため、新人監督とは組みたくないと拒否しボガートに回ってきた。

ボガートは、エドワード・G・ロビンソンが予定されていた「化石の森」(36)で、主演のレスリー・ハワードが「舞台と同じボガートでなければ自分も出演しない」と会社に主張して最初のチャンスをつかんでいた。

「マルタの鷹」は大成功を収めてハードボイルド物の教科書的存在となり、ボガートもこの分野で神格化される契機となった。

ボガートはハワードとヒューストンの二人を恩人と公言し、4度目の妻ローレン・バコールとの間に生まれた娘をレスリーと名付けた。

しかし、ハワードは第二次大戦中に飛行機事故で死亡し、それを知ることはなかった。

一方のヒューストンとは「パナマの死角」(42　未)や「黄金」(48)「キー・ラーゴ」(48)等でその後も何度も組み、一作ごとに互いの名声を高めていった。

「アフリカの女王」(51)ではボガートにアカデミー主演賞をもたらし、ボガートの葬儀で弔辞を読んだのもヒューストだった。

「風と共に去りぬ」(39)も、世紀の大作だけに企画の段階から何かと話題が多かった。

ヒロインのスカーレット・オハラ役には当時の有名無名の多くの女優たちがわれもわれもと名乗りを上げ、ハリウッドでは無名だったヴィヴィアン・リーが射止めた。

レット・バトラー役には原作者のマーガレット・ミッチェルが念頭に書いたといわれるクラーク・ゲーブルが早々に決まったが、最初はゲーリー・クーパーやサイレント時代からのスター、ロナルド・コールマンらが考えられていたといわれる。

スカーレットが憧れるアシュレイ・ウィルクス役には、戦後は西部劇一筋だったランドルフ・スコットが交渉されるもなぜか辞退。

レスリー・ハワードの方が適役だったとは思うが、スコットはせっかくのチャンスを自ら放棄しもったいないことをしたものだと思う。

「風」は下馬評通り作品賞をはじめアカデミー賞10部門を大量受賞したが、監督賞のヴィクター・フレミングには疑義も呈された。

「マイ・フェア・レディ」(64)等のジョージ・キューカーでクランクインしたものの、女性描写にばかり力を入れるとゲーブルからクレームが入り、プロデューサーのデヴィッド・O・セルズニックとも衝突してフレミングに交代。

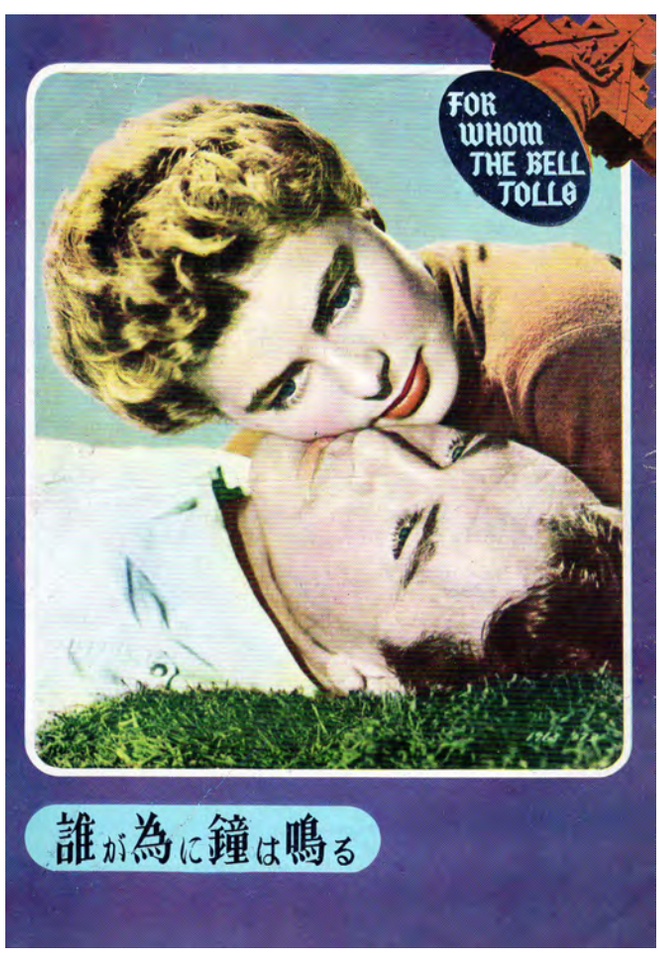
ところが、リーらの女優陣と意見が合わずに心身をすり減らして脱落し、「打撃王」(42)等のサム・ウッドが後を継いだ。

ウッドはセルズニックの言うままに撮っていて、全般にセルズニックが采配をふっていたのは業界では公然の秘密だった。

舞台と同じ役を演じた「運河のそよ風」(35)で映画デビューし、名優の名を欲しいままにしたヘンリー・フォンダ。

この映画も、ゲーリー・クーパーとジョエ

舞台でも千回以上も演じたヘンリー・フォンダの当たり役「ミスタア・ロバーツ」(55)



「誰が為に鐘は鳴る」(43)のクーパーとバーグマンの美男美女コンビ

ル・マックリーが断った後に回ってきたものだった。

そのフォンダでさえ、「怒りの葡萄」(40)に出演したがっているのを見透かされて不利な契約を結ばされ、他社にもよく貸し出されていた。

後年、くだらない映画にばかり出させられて頭に来たと述懐している。

「怒り」で主演賞にノミネートされて以来、長く同賞と無縁となったのはアカデミー賞の七不思議のひとつとされるが、舞台人との意識の強いフォンダが、舞台出演を優先して長期の契約を嫌がっていたためといわれる。

実際、「ミスタア・ロバーツ」の大ヒットで数年間映画に出演できなかったこともあった。

その映画化（55）では、監督のジョン・フォードが会社側の考えていたマーロン・ブランドやウィリアム・ホールデンを押しのけてフォンダを起用。

ところが、撮影中に役の解釈をめぐって衝突し、フォンダが殴られる事態にまで発展した。

気まずくなったフォードは病気を理由に、「哀愁」(40)や「心の旅路」(42)等のマーヴィン・ルロイとマリリン・モンローの「バス停留所」(56)等のジョシュア・ローガンに交代した。

おかげで、「怒りの葡萄」や「荒野の決闘」(46)等の傑作を生みだした名コンビは解消されてしまった。

フォンダは「黄昏」(81)でようやくアカデミー主演賞を受賞するが、その時は既に死の床にあり娘のジェーンが代わりに受け取った。

ゲーリー・クーパーとイングリッド・バーグマンの「誰が為に鐘は鳴る」(43)は、原作者のヘミングウェイが親友でもあったクーパーでなければ映画化を許可しないといってロベルト役はすぐにクーパーに決まった。

ヒロインのマリア役は、スーザン・ヘイワードらの候補の中からドイツ出身のヴェラ・ゾリーナという女優でスタートした。

ところが、バレリーナでもあったゾリーナは山中での撮影でケガを恐れて演技に集中できず、この役を切望していたバーグマンがヘミングウェイに掛け合って交代し、2週間で降板して幻のマリアとなった。

ゾリーナもスタイルのいい雰囲気のある美人ではあったが、やはり売り出し中で演技力にも優れたバーグマンに軍配があがる。

監督も予定していた大御所のセシル・B・デミルから前記のサム・ウッドに代わり、クーパーと撮っていた「打撃王」の撮影が長引いたため共に掛け持ちとなった。

クーパーはヒッチコックの「海外特派員」(40)への出演を打診されるも、サスペンスには興味がなく辞退して、衣装も貸し借りする親友のジョエル・マックリーが主演した。

しかし、「海外特派員」の出来も評判も予想以上に良かったので悔しがり、スパイ物の「外套と短剣」(46)に出演した。

この頃、第二次大戦でクラーク・ゲーブルやジェームス・スチュアートらをはじめ多くの男優たちが出征して男優不足が深刻となり、「風」で心優しいメラニー役を演じたオリヴィア・デ・ハヴィランドが所属会社のワーナーを相手取って起こした訴訟に勝利し、映画会社の絶大な権限を制限する通称「デ・ハヴィランド法」が成立したことで、徐々に映画界の図式が変わってきた。

顔ぶれにも変化が見られ、アラン・ラッドやジョン・ペイン、女優ではエリザベス・テイラーやジューン・アリソン等が戦中派に当たる。

戦後になると、バート・ランカスターやカーク・ダグラスに代表される戦後派が台頭してくる。

これらの男優陣は戦前派とは異なる強烈な個性を持ち、それまでの映画スターの概念まで変えていった。

独立心が旺盛なのも特徴で、映画会社の力が以前より弱まったことも追い風となって、後に自身のプロダクションを興し、メジャーでは扱わないような問題作等も制作して映画界に新風を吹き込んでいく。

戦後派の中でも異色の存在といえるのが、ジョン・ウェインの「赤い河」(48)で映画デビューしたモンゴメリー・クリフトである。

男優不足に陥っていたハリウッドは、ブロードウェイの舞台で評判を取っていたクリフトに早くから目を付けていたが、なかなか応じず戦後になってようやく重い腰を上げた。

しかし、自分の演じたい役にしか興味を示さず、持ち込まれる企画を惜しげもなく次々に蹴って周囲を困惑させた。

その中には多くの名作、話題作も含まれ、クリフトは代役を輩出する宝庫ともいえた（次号につづく）。

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録（電子版）」(ユニワールド)「猫と映画人（電子版）」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。

＊当書 DVD 版は、月刊 FDI 編集部にて＊
本文：108 ページ / 映像：2 分 23 秒　2012 年 9 月 ミリアムワード㈱ 発行
価格：1,980 円（税込）
株式会社ユニワールド　東京都世田谷区上北沢3-17-5 杉本ビル1F